



(奈良)

検出した遺構には、西大門・一乗院門跡・勅使坊門跡等がある。このうち勅使坊門跡は、長径約一・五m

奈良・興福寺勅使坊門跡下層

- 1 所在地 奈良市登大路町
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)九月～十二月
- 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所
- 4 調査担当者 中井一夫
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

興福寺を南北に二分する道路は、現在奈良県庁前の道路として拡張され、古い地割ラインはこの道路の中央分離帯として残されている。今回この分離帯の幅を

縮小することとなり、これに先立って地下遺構の残存ぐあいを知るための調査を行った。

の巨大な自然石を利用していたが、このベースは九世紀代の池を埋めた整地土であった。この整地土下で検出された池は、調査区内ではその規模を知ることができなかったが、地山の観察からほぼその南端部あたりのようである。東西方向の規模も上部遺構を破壊することができないので確認できなかった。この池底には約二〇cmの厚さで黒色有機質土が堆積しており、木簡はこの層から黒色土器片・フイゴ羽口等と共に検出した。

8 木簡の积文・内容

(1) ・「池」

・「」

141×21×2 033

(2) 「」

(163)×(22)×3 019

二点の木簡が出土している。いずれも表面の腐食がはなはだしく、墨痕が薄くなっているため、文字を読むことが出来ない。(1)は上部に切り欠きがあり、下端を尖らせている。裏面の文字は小さく書いている。表裏ともに木目が浮き出ており、しばらくの間、風雨にさらされていた可能性がある。(2)は左右端ともに割られている。

(中井一夫・8は和田 萃)